

小川未明「時計のない村」論——ユートピアンの夢

増井真琴

はじめに

小川未明「時計のない村」は、大正一〇年一月、雑誌「婦人公論」へ掲載された童話である。小笠裕二編『小川未明全童話』(日外アソシエーツ、平成二四年二月)によれば、本作の概要は次の通りである。

時計のない村に、金持ちが時計を買ってきた。もう一人の金持ちも時計を買ってきた。甲の時計と乙の時計が三十分違っていて、どちらが正しいか争いになる。やがて甲の時計がこわれ、乙の時計も壊れる。村にまた平和が戻った。

初出後は、同年五月発行の童話集『赤い蠟燭と人魚』(天佑社)へ初収されたのを皮切りに、数多くのアンソロジーへ採録されている。約二〇〇編ある未明童話——忘れられたものも多い——の中にあつて、人気作の部類に数えられる作品と言えよう^①。

収録本の中で、とりわけ興味深いのは、『小川未明全集第二巻

時計のない村』(フタバ書院成光館、昭和一八年九月)である。これは「大東亜戦争」中、二巻だけ刊行された「幻の全集」^②の内の一冊で、「時計のない村」が巻名に選ばれた唯一の単行本だ。編者の「あとがき」には、「時計のない村」といふお話も、面白いたとへ話になつてゐますが、これもその時代の空気のよく出てゐるもので、人間がだいいじな心に頼らずに、機械に頼つたために起るばかばかしいをかきみを書かれたもの」と解説が付されている。また戦後には、本作と内容が酷似した、童話「正しい時計」(五年の学習)昭和二八年六月)が発表されている。おそらく抄録だろう^③。本作に關しては、未明自身も自負するところがあつたに違いない。

しかるに、「時計のない村」の先行研究は、驚くべきほど少ない。続橋達雄『未明童話の研究』(明治書院、昭和五二年一月)で、一節を設けて論じられているのが、ほとんどすべてである。だが、後で詳しく述べる通り、この続橋論には、「時計のない村」本文のテキスト分析が一切ないという、致命的欠陥がある。続橋は、古代中国の「擊壤歌」の世界観との類似という切り口から、他の未明作品を列挙、内容紹介して行くのだけれど、全体として印象批評の風が

否めない。筆者は、印象批評ではなく、テキストや同時代の一次資料に基づいた、実証的な分析を試みたい。

本稿は「時計のない村」の新たな読みの可能性を開くためであるが、その論述の一切は、作品末の解釈に帰着する。つまり、村人は何故時計を捨てたのか、あるいは、未明は何故村人に時計を捨てさせたのかという問いだ。以下、本作が発表された、大正一〇年一月前後の未明の社会主義思想・童話観や、本作および関連する他童話の「時計」表象に着目しながら、この点を明らかにしたい。

村人が時計を捨てる行為は、近代への決別であり、原始への回帰であつた。そしてその回帰は、小川未明の夢以外の何物でもなかつた——というのが、さしあたり、本論の結論である。

一、大正一〇年一月前後の未明

先述の通り、童話「時計のない村」が「婦人公論」へ掲載されたのは、大正一〇年一月である。本節では、作品解釈の前段階として、大正一〇年一月前後の小川未明の文壇上の位置および思想傾向を見定めたい。

大正年間には、一般に、未明が社会主義思想・運動へ接近した時期として知られている。例えば、山室静は「小川未明論」(『現代日本文学全集』第七〇巻、筑摩書房、昭和三二年二月)で、未明の作家人生を新浪漫主義時代・社会主義時代・童話作家時代の三期に分け、明治末から「童話作家宣言」までの、およそ一四・五年間を、社会主義時代と分類した。だが、より焦点を絞れば、「時計のない村」が発表された大正一〇年一月前後は、未明の社会主義への

接触が、とりわけ本格化していた時期であつたと言えよう。前年、大正九年九月には、日本社会主義同盟へ結集を表明し(「社会主義同盟に六文士加入」『東京朝日新聞』大正九年九月九日)、設立発起人に名を連ねているし、一二月には、官憲の猛弾圧の最中、創立総会を挙行している(「発会式留られ不意の創立総会」『東京朝日新聞』大正九年二月一〇日)。また、翌大正一〇年四月には、暁民会の講演会へ、エロシエンコヤ加藤一夫と出席したりもした^④。

このような社会主義への傾斜は、未明に限らない。当時の文壇の流行でもあつた。例えば、未明とともに、日本社会主義同盟へ参加した江口渙は「今度私が日本社会主義同盟に加はつたといふ事に対しては格別大した感想もない。何となれば今や広義に於ける社会主義は、新しい時代の常識となつて仕舞つた以上自分もさういふ新時代の常識を以て進んで行くといふ事に不思議はない」(「文学者の眼から見た社会主義同盟」『読売新聞』大正九年九月一八・二〇日)と述べ、社会主義を「新時代の常識」と形容している。

あるいは、有島武郎は「私は決して社会主義の理解者だなど大きな口をきく事は出来ませんが、僅かばかり聞き囃つたり、読みかじつたりした所から云つても、社会主義といふものが当然将来の社会生活を指導す可きものであるのを疑ふことが出来ません」(「最近文壇のいろいろ」『文章俱樂部』大正九年十二月)と語り、近未来における社会主義の指導性を確信していた。菊池寛も「どんなイズムが文芸の中心となるか」という「新潮」編集部問いに、「社会主義的思想を背景にした新しい文芸だが、その中心となることは疑ひが無いのだが、果してそれが文芸上の進歩になるか退歩にな

るか、其処までは明かにわからない」(大正十年文壇予想)「新潮」大正一〇年一月)と答え、文芸上の効果については留保しつつも、社会主義の影響力自体は、疑いの余地がないものとしている。

そんな中、未明は文壇内部で、どのような評価を下されていたのだろうか。宮島新三郎は「欧州大戦の結果が導いた大きな思潮の一つは明かに社会改造の四字に尽きる理想主義である」と時代を概括し、「単独に自己の境地を開いて来た中堅といふよりも大家の列に入るを至当とする作家」に、未明と谷崎潤一郎を挙げている。

小川未明氏の頭脳は常に急行列車の如き焦燥を以て埋められてゐる。停止する所を知らず、何時他の列車と衝突しないとも限らぬ。然し進まねばやまぬのだ。何物かの力を感じしめるのは全く其の爲めである。氏は昨年社会主義同盟に加入した。然し氏は飽くまでも北国の詩人である。吾人は氏に於て詩人的社会主義者の好典型を見る。

宮島新三郎「文壇の現状を報ずる書」
(文章倶楽部) 大正一〇年一月)

宮島は「急行列車」詩人的社会主義者の好典型」という評を通して、理想へ向かつて猪突猛進する、未明の活力や純な心意気を指摘したかったのだろう。

また、平林初之輔は「昨年から本年へかけて、社会運動に刺激された所謂労働文学が文壇の一部に提唱されることとなつた。これは今日の文壇があまり個人の愛欲に偏奇して社会的正義を閑却してゐ

められるに到つた当初から、真の民衆の心を心とする民衆的芸術家によつて開始されて来たのです。今も、戦はされつつあるし、将来に於ても戦はつづけられる。理性が地上のすべてを征服し、而して全く、人間性の勝利に帰せざる限りは、恐らくこの戦は、止む時がなからうと思はれるのであります。

「来る可き文壇と主観の客観化」
(読売新聞) 大正九年二月二七・二八日)

これまでの未明研究は、アナボル対立の結果、昭和初年以降、未明がアナ派の旗印を鮮明にしていった経緯から、大正期の未明をも、週及的にアナキズムやヒューマニズムの系譜に位置付けるのが常だった。しかし、大正期の未明が「唯物史観」や「階級闘争」を是認したり、マルクス・レーニン・ロシア革命を賛美するなど、マルクス主義に親和性を有していた点は、注意が必要だろう。両思想は、言わば未分化のまま、併存していたのである。

ところで、「時計のない村」発表時の未明の創作力には、凄まじいものがあった。まず、数の話で言えば、大正一〇年一月、未明は六本の小説(「浮浪者」「駭者」「戦慄」「老旗振り」「雪の上」「風の鞭」、六本の童話(「時計のない村」「殿様の茶碗」「金の魚」「世界の幸福者」「善いことをした喜び」「青い着物を来た子供」、七本の評論・随筆類(「感想一二」「芸術の蘇生時代」「此意味の羅曼主義」「私の好きな露西亞の三作家」「興味を惹いたもの」「恋愛によつて何を教へられたか」「私の好きな小説戯曲中の女」)を執筆している。小説集「赤き地平線」(新潮社)も出版した。多作だ。質の

た欠陥を充すものとして当然起らねばならぬ運命であつたのである」(大正九年の文壇を評す)「新潮」大正九年二月)と情勢を分析し、「従来の文壇から転じて最近社会小説の色彩を濃厚にしたもの」に、未明・江口渙・宮地嘉六の名を挙げている。だが、「之等の作家の大部分は前に言つたやうに全然従来の文壇から離れた新しい立場に立つてゐると言はれないので、これ等の人々の手によりて文学革命が成就されるとは期待されない。ただ中流階級的思想と趣味との一角を切り崩すことに満足しなければならぬだらう」とも述べ、その革新性には否定的だ。

未明自身の言説も確認しておきたい。この時期、未明は「最早時代の潮流は知識階級の黙眠を決して許しはしない、総ては旋風の渦巻の中に巻き去られるだらう。民衆の運動の火の手は総てを焼き尽す」(「真の民衆文芸の勃興を明年文壇に望む」)「読売新聞」大正九年二月一日)、「今日の民衆運動は、真理が当然その赴くところに行く過程の一つだ。而も、曾て見なかつた力強い運動である」(「感想一二」)「新潮」大正一〇年一月)と語っており、社会変革を牽引する民衆運動のダイナミズムに、多大な期待を寄せている。加えて、「唯物史観」や「階級闘争」という語を、肯定的文脈で使用している事実も、無視すべきではない。

唯物史観は、近世社会経済組織の崩壊を予言する。而して、真理である。一定の方針に進んで来た過去の歴史が其れを実証する如く未来がまた其れに基いて実証されなければならぬものである。(中略) 人間性の解放と愛護の戦は、階級闘争の事実が認

面から言つても、「時計のない村」や「殿様の茶碗」は、その後、未明童話のアンソロジーへ度々採録される、好篇である。

そして、代表作として名高い「赤い蠟燭と人魚」が発表されたのは、翌大正一〇年二月。後から振り返れば、大正一〇年一月前後は、小川未明の全盛期とさえ言えるかもしれない。

二、童話「時計のない村」——標準時と近代時間秩序の編成

それでは、このような小川未明の文壇・思想上の立ち位置を踏まえ、童話「時計のない村」を読んで行こう。

まず先行研究だが、管見の限り、本作の作品論は、続橋達雄『未明童話の研究』(明治書院、昭和五年一月)しかない。続橋論の要点は、次の文章にある。

しかし、もつとも印象深いのは、作品の冒頭と末尾の照応関係であり、とくに終末の部分が強烈である。というのは、時計に象徴される近代・現代の技術文明を拒否し否定した生活様式を、肯定し賛美しているかに見えるからである。これが空想上の、虚構の世界であるにしても、作者の想像力のありようを考えないわけにはいかない。

続橋は、時計を「近代・現代の技術文明」の象徴と捉えている。そして、作品末、それが村人に捨てられたことをもって、「近代・現代の技術文明」への拒否・否定と見做す。

さらに続橋は、「唐突のことながら、わたしはここで、次のうた

を思い出した」と述べ、古代中国の撃壤歌を引用。「日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉」（日出て作し、日入りて息う、井を鑿ちて飲み、田を耕して食う、帝力我に于て何か有らんや）というような自然生活の養美が、「未明の夢想」として、本作や他のいくつかの童話——例えば、「自分の造つた笛」（『小さな草と太陽』赤い鳥社、大正十一年九月）、「幸福に暮した二人」（『童話』大正十二年一月）——に流通していると指摘している。

だが、続橋の立論は、一部本質を突いているように思える箇所は存するものの、全体として印象批評の風が否めない。前者に関しては、「時計のない村」本文のテキスト分析がまったくなされていなし、後者に関しては、続橋自身、「現在わたしが目睹し得た範囲内では、未明が右の詩文に直接言及していることはない」と認めている通り、未明と撃壤歌の関係が不明だからである。筆者としては、早急な推断を下す前に、もう少し作品に寄り添った解釈を試みたい。

本作読解の鍵は、未明が「時計」を、どのような存在として表象させているかにあるだろう。続橋は「時計に象徴される近代・現代の技術文明」（傍点引用者）と言うが、私は時計単体で、何を意味するか考えたい。結論から先に言うと、本作において時計は、近代時間秩序の編成者として表象されている。どういふことか。

そもそも、この物語の村は「町から遠く離れた田舎」にあり、村人は長い間「太陽の上り具合を見て、凡その時刻をはか」っていた。しかし、村の金持ちの一人が「この文明の世の中に時計を用ひなくては話にならぬ」と考え、ある日、町で時計を仕入れて来た。

に統一化された時間が、日本人の生活や労働を律する、不可欠な指標となったことは言うまでもない。時計・定時法・標準時は、日本の近代化と直結していた。

「時計のない村」に時計が持ち込まれることは、この近代的な時間秩序の中に村が組み込まれることを意味する。だからこそ、本作の二人の金持ちは、時計購入の際、その時計の時間が正確なものであるかどうか、執拗に気にしていたのだし（「この時計は、狂ふやうなことはないだらうな」「この店の時間は、間違ひがないだらうな」）。「この時計は狂はないだらうか」「この時計の時間は、合つてゐるだらうか」、時計屋の番頭から標準時と同一であると聞いて（「決して、間違つてゐません。標準時に合つてゐるのでございませぬ」）／「標準時に合つてゐます」、安心するのである。また、二人の時計に三〇分のズレが生じ、両者が正統性を主張する根拠としたのも、標準時との同一性であった（「この時計は狂つてゐない。標準時に合つてゐるのだ」）／「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちゃんと合はして来たのだ」。

換言すれば、本作の時計は、単なる「村の時計」ではなく、標準時と連なる「町の時計」「国の時計」であることよって、權威を有していたと言える。二人の金持ちは、その点に極めて自覚的だった。

一方、村人は時計をどのように受容していったのだろうか。村人の時計受容は、驚異↓信頼↓不信↓拒否の四段階で、推移している。まず、驚異の段階の村人は、「毎日のやうに其の金持の家へ押しかけ」、「独りで動く針を見て不思議に思ひ」、「圃に行つても、

金持ちの企図は、語り手によつて、次のように語られる。

其の金持は、今自分は沢山の金を払つて、時計を求めたことを心の中で誇りとしました。今日から、村の者達は、万事集りや、約束の時間をこの時計に依つてしなければならぬと思つたからであります。

この金持ちにとつて時計は、村人の「万事集りや、約束の時間」を規定する文明の利器であり、一面においては、村人に対する管理・支配の道具だった。何故時計がそのような力を持つのかと言えば、それは時計の刻む刻限が、村以外の共同体——例えば、町——でも通用する普遍性を有しているからに他ならない。

小島健司『明治の時計』（校倉書房、昭和十三年二月）によれば、日本で時計が普及するきっかけとなったのは、明治五年の改暦である。夜明けから日暮れ、日暮れから夜明けを各六刻（計一二刻）に分ける太陰暦Ⅱ不定時法から、一日を二四時間に分ける太陽暦Ⅱ定時法へ切り替えることによつて、「洋時計が実用の道具としてつかわれる条件はととのつた」。また、明治九年の勅令第五一号「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」によつて、イギリス・グリニッジ天文台を「本初子午線」とし、「東経百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム」ことが決せられた。

不定時法から定時法への移行、標準時の導入という二つの契機によつて、日本には時計が広まり、日本国民は、全国津々浦々、共通の時間を有する——強制される——に至つたのである。この全国的

山に行つても寄ると時計の話をした。次に、信頼の段階へ入ると、村人は、二人の金持ちの時計をそれぞれ信じ、両者の派閥抗争へ参戦する。この時点で、時計は「貴い掟」や「神様」のようになっていた。ほとんど、物神崇拜である。しかし、乙の金持ちの時計が壊れると、乙派の村人は「其の日から真暗になつたやうに、全く時間といふものが分らなく」なり、「壊れるやうな時計は、もう信用することが出来ない」と、時計への不信を露わにする。さらに、甲の時計も壊れるに及んで、村人は「時計があつたつて、なくなつて、この一日には変わりがないぢやないか」と原点復帰し、「時計なんか、いらぬ。お太陽様さへあれば沢山だ」と、時計を拒否するに至る。かくして、「皆なは、また昔のやうに一致して、いつとなく村は平和に治つた」。

以上見てきた通り、本作の時計は、不定時法から定時法へ移行し、標準時と連なるための近代時間秩序の編成者として表象されている。そして村人は、一度は「神様」のように時計を信奉したものの、最終的に拒否し、前近代の「お太陽様」の世界へ戻る。定時法や標準時を定めるものが、近代国家以外の何物でもない以上、時計の拒否はそのまま、近代国家が推進する近代化の拒否を意味するだろう。村人は最後、時計という近代を捨て、未開の村落へ引きこもつたのである。

それでは、この結末と未明の社会主義思想には、一体どのような関係があるのだろうか。再び大正一〇年一月の時点へ戻るならば、この月、未明は次のような発言を行っていた。

街頭を散歩する時、漫然一種の反抗と憎悪とを覚えるのは、何故かと考へる時、其は、世の中は段々と文明に赴いて行くにも拘らず、それが為に人類の生活は決して進歩してやしないといふ事だ。否寧ろ反つて文明の爲めに、処を同じうし、時を同じうして生存する人々の間に生活が著しく懸隔を生じて来てゐるといふ事だ。不老不死の薬が発見され、癌の新治療法が工夫され、例へ一時間に幾百哩を疾走する急行列車が出来てもそれ等が極めて低廉な費用にて行はれない限り、一般民衆には何等の幸福をも齎しはしない。寧ろ生活の懸隔が出来る計りだ。これは原始時代にはなかつた現象だ。人類平等の幸福を外にして、人類の進歩はない訳ではないか。私は昔の民族生活に憧れる牧歌精神を諒とする。未来をかけて、何者かを翹望する見込がなかつたら、今日の生活の不平等を来した物質文明を呪詛し、都會を憎悪し、機械を呪ふ彼等の精神を諒とする。

〔此意味の羅曼主義〕（時事新報 大正一〇年一月一九日）

ここで未明は、文明の恩恵が一般民衆へ行き渡らず、かえつて格差を拡げてしまふだけの現状に対し、「これは原始時代にはなかつた現象だ」と憤っている。そして「人類平等の幸福」の観点から、「昔の民族生活に憧れる牧歌精神を諒とする」「物質文明を呪詛し、都會を憎悪し、機械を呪ふ彼等の精神を諒とする」と、反近代・反文明の精神を称賛している。

貧富の差を撲滅しようといふ意気込んでいる限りにおいて、未明の立場は社会主義的なのだが、その解決策として、高度に発達した生産

その中であつて、筆者が特に注目したいのは、「時計物語」と「街の時計」の二作品である。というのも、両作は、「時計のない村」と極めて類似した物語類型を持つからである。つまり時計が、定時法や標準時と連なるための近代時間秩序の編成者として表象され、作品末、人間から捨てられる話だ。以下、細かくテキストを見て行こう。

「時計物語」は三人称童話。登場人物は、小さな工場を経営するお爺さんと、工場で働く村人である。この物語の村は「まだよく開けてゐない、淋しい田舎」にあり、村人は「太陽の上り具合で仕事を始めて、また太陽の下り具合で仕事を止めて家に帰」つていた。

しかし、お爺さんが「遠い町」から時計を買つて来ると、労働時間「午前は八時から、午後は四時まで」と、厳密に管理されるようになる。

「どうだな、時計といふものは便利なものだらう。きちんと仕事を始める時がきまつて、また止める時がきまる、今迄のやうに、早かつたり、遅かつたりすることはなくて、誠に結構なことだ」と、お爺さんは、大きな腹を抱へて笑ひながら言ひました。

お爺さんの狙いは、時計を使った労務管理、すなわち、八時間労働制の施行に他ならない。その結果、それまで「皆なの都合の好いやうに帰ることが出来た」この工場は、「時計が来てからは一分も早く帰すことはし」なくなつてしまふ。

手段の共有化ではなく、格差なき「原始時代」を対置してしまふ点に、未明の社会主義の異質性があるだろう。つまり、未明の社会主義には、近代より前近代をよしとする指向、進歩主義的というより退化主義的な側面が垣間見られるのである。

三、変奏される時計童話

ところで、小川未明の時計に関連した作品は、「時計のない村」だけではない。彼は、時計を主要な題材とした童話を、数多く執筆している。

今仮に、それを「時計童話」と呼ぶなら、その作品群は、「青い時計台」（処女）大正三年六月、「時計物語」（婦女新聞）大正七年一月四日、初収時「時計の話」、「時計とよつちやん」（ある夜の星たち）イデア書院、大正一三年一月、「おじいさんの時計」（サンデー毎日）大正一五年一月四日・二日、「小さい針の音」（解放）昭和二年五月、「街の時計」（スキー）昭和四年四月一日、「正二君の時計」（台湾日日新報）昭和五年二月八日（九日夕）、「みどり色の時計」（幼年ブック）昭和三年六月、「時計と怒の話」（小学五年生）昭和六年九月）の九つが挙げられよう。先述の抄録「正しい時計」を加えれば、一〇か。いずれにせよ、未明は童話創作の初期から晩年まで、時計という素材を好んで多用していたことがわかる。

労働を、時計の刻む刻限によつて縛るのは、近代に特有の現象だろう。「時計のない村」と同様、本作において時計は、村人を定時法の世界へ組み込む、文明の利器として表象されている。

加えて、作中人物が、最終的に時計を拒否する点も、「時計のない村」と同じである。ただし、「時計のない村」の村人が、一時的にはあれ、時計を信頼していたのと異なり、本作の村人は、始めから、時計という存在に相容れないもの、抑圧性を感じている（「皆は時計が来てから何となく窮屈で叶ひません」）「皆なは却つて規則が六ヶしくなつたので内心に困つてゐました」。そして、村祭り参加のための早退を断られたことを期に、村人は反抗を開始。お爺さんが居眠りした隙に、時計の針を早め、二日続けて、定時より早く退勤してしまふ。最後、皆に誤魔化されたことを知つたお爺さんは、「やはり、今迄通り、お日様できめることにしやう」と言い、「時計を柱から取りはづして、何処へかやつてしま」つた。「其れで、この村には、全く時計といふものは無くなつてしまひました」。時計によるタイトな労務管理は破綻し、村人は「お日様」の世界へ、再び回帰して行つたのである。

「街の時計」は三人称童話。登場人物は、時計台の「大きな時計」と、会話相手の雀である。この時計は「十字街のにぎやかな畔」に立つ、「正確な標準時計」であり、人間の視線を感じては、「あの男は、おれを見て、自分の時計の時間を直すのだな」「あの人は、約束の時間に、まだ間があるので、安心して行くのだな」と独語している。そして、人の役に立つことに、「なんとなく誇らしい気持ち」を感じていた。「時計のない村」には、自身の時計の正確さを訴え

る金持ちが、「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちやんと合はして来たのだ」と発言する場面があるが、本作の時計はまさしく、そのように人々から参照される「町の時計」に他ならない。共同体を統べる標準時の体現者として、本作の時計は表象されている。

だが、この「正確な標準時計」は、「おれには、春も、冬も、ない」状況、すなわち、自然からの疎外や、「自分が、忠実に働いてゐることを誰もあたりまへのやうに思つてゐる」他者からの感謝なき現状などに、「馬鹿馬鹿し」さを感じ始める。そして、「あまり正直にすると損ですよ。ちつとは、狂つて、有がたみを教へておやんなさい」という雀の口車に乗り、「よし、おれは、おくれやう」と決意。サポータージュを開始した。

結果起こるのは、町の秩序の混乱である。

相変わらず街の中は雑沓しました。人々は、時計を仰いで、往つたり来たりしました。しかし、正確な、標準時計が狂つたので、其日は、汽車におくれたり、取引に差支を生じたりして、大変なことが生じました。時計は、復讐をしましたが、同時に、とり下されて、明日から、廢物となつてしまつたのです。

標準時が乱れると、時刻表で動く「汽車」や一分一秒を争う「取引」は、支障をきたさざるを得ない。近代時間秩序の編成者は一転、秩序破壊者へと転落してしまうのである。待ち受けるのは、「廢物」化のみだ。より物語に則して述べるならば、この擬人化さ

いろの交渉を、再び眼の前に真実に画くことに於て、そこに芸術の世界を造るよりほかに、童話のゆくべき途はない様に思はれる。(中略) もし、それがほんとうの芸術であつたなら、大人が読んでも面白ければ、又子供が読んでもそれを理解し得ないことはない筈である。何となれば、作者の子供の時分の真実なる感想は、今もなほ子供の魂に触れ、神経に通ずるからである。

「序」〔赤い蠟燭と人魚〕天佑社、大正一〇年五月

「童話」といふ言葉は、かの「おとぎばなし」といふ言葉のやうに、子供のために文学と、ややもすれば解せられるやうでありますけれど、私自身は独り子供のために語るのではなく、其れに対して、一つの主張を持つてゐるのであります。子供の心をなほ忘れずにゐる、すべての人々に向つて、作者である私が、また子供の心持に立ち帰つて、ある感激を訴へるといふことに、このことは過ぎないのである。子供の時の心程、自由に翼を伸ばすものは他にありません。また汚されてゐないものもありません。

「私が童話を書く時の心持」〔早稲田文学〕大正一〇年六月

ここで未明は、作者自身が子どもの心に立ち返つて童話を創作する必要性（子供の時分の、自然及人間に対するいろいろの交渉を、再び眼の前に真実に画く）／＼子供の心持に立ち帰つて、ある感激を訴へる」と、子どものみならず大人にも伝わり得る童話の芸術

れた主人公は、近代を生きる人間に殺されてしまつたのである。

とすると、「街の時計」の末尾は、「時計のない村」「時計物語」の末尾と、やや位相を異にしていると言わなければならない。時計が人間の手で捨てられる点は三作とも共通しているが、前二作の時計が、「お太陽様」「お日様」の世界へ帰るべく、ポジティブに放棄されていたのに対し、本作の時計は、標準時の世界を存続するために、ネガティブに遺棄されてしまつてゐる（追つて、新しい標準時計が時計台へ嵌められることだろう）。前近代への回帰がユートピアなら、近代の継続は、まるでディストピアのようだ。前節で詳述した、「時計のない村」の近代否定・前近代肯定は、他の時計童話でも、かたちを変えて変奏されているのである。

それは、作者・小川未明に深く根を下ろした思想だからこそ、繰り返し反復されたに違いない。

四、未明の童話観——童話という夢

さて、では、そんな近代への嫌忌、前近代への渴求溢れる「時計のない村」を、小川未明が童話という形式を通して物語つたのは、一体何故だろうか。それを童話として物語ることに、固有の意味はあつたのだろうか。

三度、大正一〇年一月時点へ立ち戻り、この時期の未明の童話観を確認したい。

自分自身の、最早や取り返すことの出来ない、輝かしい、そして決して帰つて来ない子供の時分の、自然及人間に対するいろ

性（大人が読んでも面白ければ、又子供が読んでもそれを理解し得ないことはない）／＼子供の心をなほ忘れずにゐる、すべての人々に向つて」を、両論に跨つて主張している。そして未明が、子どもを純真な存在と捉えていたことは論を俟たない（「子供の時の心程、自由に翼を伸ばすものは他にありません。また汚されてゐないものもありません」）。

してみれば、この時期の小川未明にとって童話とは、あらゆる人へ向け、自己の純真な夢を訴へる文学形式だと言えよう。「時計のない村」の村人が「お太陽様」の世界へ帰る時、それは未明の夢でもあつたのである。

おわりに

以上、本稿では、小川未明の童話「時計のない村」（「婦人公論」大正一〇年一月）に関する作品分析を、作中の時計表象へ着目しつつ、行つた。

その結果、明らかになつたのは、本作の時計が近代時間秩序を生み出す編成者として表象されていること、したがつて、村人による作品末の時計放棄は、近代への決別——原始への回帰——を意味しているということである。童話を自己の純真な夢と捉えていた当時の未明の童話観に照らせば、この反近代的なユートピア志向は、未明自身の夢でもあつたと言えるだろう。一般に、大正期の未明の思想は、アナキズムの枠組みで理解されており、本作のユートピア志向を、そのような文脈で理解することは十分可能だ。

一方で、当時の評論類に目を凝らすと、この時期の未明が、唯物

史観や階級闘争を肯定するマルクス主義的な側面を保持していた事実がわかる。文学史上、アナキストとマルクストの分岐が鮮明化するのには、青野季吉「自然成長と目的意識」(「文芸戦線」大正一五年九月)や日本プロレタリア芸術連盟の成立(大正一五年一月)以後だが、未明においても、大正年間には、アナとボルの二つの要素が未分化のまま併存していたというのが実情ではなからうか。

私たちは、小川未明のマルクス主義的な側面を再評価するとともに、両思想の雑居性を注視するべきなのである。

注

(1) 小笠裕二「概説」(『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年二月)の「童話集収録頻度表」によれば、「時計のない村」の収録回数は一三回。全体では一〇位と高順位にある。ちなみに、上位三作は「月夜と眼鏡」(赤い鳥)大正一二年七月、二九回、「赤い蠟燭と人魚」(東京朝日新聞)大正一〇年二月一六・二〇日、二六回、「港に着いた黒んぼ」(「童話」大正一〇年六月、二三回)で、いずれも大正一〇・一一年に集中している。

(2) 小川未明文学館HPの「所蔵品紹介」⑤「幻の全集」より。昭和一八年に刊行開始された、フタバ書院成光館版のこの全集は、当初全二巻の企画だったが、戦局悪化のため、二巻のみで中断された。二巻とも、装丁を有馬生馬、挿絵を初山滋が担当している。

(3) 「正しい時計」(五年の学習)昭和二八年六月)は、小笠裕二編「小川未明Ⅱ 全小説・随筆」(日外アソシエーツ、平成二八年六月)に、「感想」という区分で書誌が記載されている。しかし、同作には明確な物語性があり、感想ではないだろう。

此岸にたつか彼岸にたつかといふ一点で文学の将来は定まるのである」と述べ、文学者に対し、階級を選択を突き付けている。折からの民衆芸術論は、中野秀人「第四階級の文学」(「文章世界」大正九年九月)によって、階級意識を闡明化させていったわけだが、平林の論はこの方向性に掉さすものと言えよう。

(7) 例えば、山室静は、大正期の未明の社会主義思想への接近について、「その立場は人道主義とクロボトキン流の相互扶助を基調にするもので、マルクス流の唯物論と階級闘争説にはほとんどまったく無縁だった」(「解説」『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年二月)と語っている。また、上笙一郎は「ネオ・ロマンティズムの作家として自己形成してきた未明は、マルクス主義思想とリアリズムにはなじみせず、ロマンティズムを許すアナキズムに親炙していったのであった」(『小川未明』日本児童文学学会編「日本の童話作家」昭和四六年九月)と、猪熊葉子は「根本的には理想主義に根ざすヒューマニストであった未明が、その思想の帰点として辿りついたのは、詩の原理としてのアナキズムであった」(『小川未明』続橋達雄他編「講座日本児童文学」第六巻、明治書院、昭和四八年九月)と、それぞれ解説している。

(8) 例えば、林政雄は、「小川未明氏の近業二つ」(「新興文学」大正二二年四月)で、「未明氏の思想はボルシエヴィストの思想であるか、トアナキストの思想であるか私達は斯の『人間性のために』全編を通じては知る由もない。或は部分はボルシエヴィズムの声であり或る個処はゼアナストの叫びである」と述べ、大正一二年当時、未明の思想が、アナボルどちらにも解釈し得る、未分化なものであったことを指摘している。その他、大正期の未明のマルクス主義への親和性については、拙稿「小川未明の知識人批判——『童話作家

(4) その他、この時期の未明は、佐野学・加藤一夫・新居格らと「文芸、思想問題の雑談を目的」とする「青空会」を起こしたり(「よみうり抄」『読売新聞』大正九年八月一七日)、堺利彦・野依秀一・山崎今朝弥らと著作家組合の懇親会へ参加する(『著作家組合懇親会』「読売新聞」大正九年二月二六日)等、社会運動界隈の人士と積極的に交流している。「盆裁によらず、骨董によらず、あまりに静かで瞑想的なものは、何だか今の自分の気持と合はなくなつたやうだ」(『壺の話 小川未明氏』「読売新聞」大正九年一〇月一九日)とは、当時の未明の言葉らしいが、「静かで瞑想的」ではいられないほど、社会変革の志に燃えていたと推察されよう。

(5) 同種の指摘は、木村毅も「文芸と時勢」(「文章世界」大正九年二月)で行っている。木村は、当時の文壇を俯瞰し、「今の時勢を目してほぼ社会問題討究の時とした事」「文芸を目して、必ず時勢に先んぜねばならぬ約束を持ったもののやうに考へた事」の二つを、その特徴点として挙げた。そして木村自身、「私も、今の時代を社会問題討究の時であるとするのに別に不服はない。又文芸をして、時代即ち社会問題に接触せしめよと言ふのにも賛成である」と、文士が「社会問題討究」をすることに賛意を示している。他作家の言説を含め、この時期、社会問題への関心が文壇を席巻していた様子がうかがえる。

(6) さらに平林は、本論で「社会的良心をもつたものには、曖昧な妥協的態度は堪へられなくなつて来た。民衆の一人になるか民衆の敵となるか以外に、立場が許されなくなつた。利害のまるで反対する二つの階級に社会がわかれかかつて来た。文学が社会と絶縁することの出来るものでない限り、たとひ作品に於て如何なる題材をとり扱はうとも、文学者自身は立場をきめねばならぬことになつて来た。

宣言」の真意をめぐって(「社会文学」平成二八年八月)で詳述した。

(9) (1)と同じ、「童話集収録頻度表」によれば、「殿様の茶碗」(「婦人公論」大正一〇年一月)の収録回数は一六回。全体では七位である。(10) 岡上鈴江「又小川未明」(新評論、昭和四五年五月)によると、「赤い蠟燭と人魚」の原稿依頼へ訪れたのは、当時、朝日新聞社の社員だった岡本一平らしい。岡本は「大正十年の一月のある日、羽織はかま姿で父を訪問すると、なにか中編ものを書くように頼んだ」そうだ。

(11) 独立した作品論ではないが、周辺情報として「時計のない村」に言及している論考は、いくつもある。例えば、佐藤宗子は、「児童文学における「音・試論」(千葉大学教育学部研究紀要)平成三年二月)で、「いつとなく村は平和に治つたといふことであります」と昔話のしめくくりのように結ばれているが、現実には「時計」なしで生活することが不可能であるなかで、せめて児童向けに、そんな非現実の村を語ろうとしたのだろう」と述べ、作者・未明が児童向けに、時計のない生活という非現実なファンタジーを提示して見せたとする考えを示している。また木村小夜は、「小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」(『福井県立大学論集』平成一九年七月)の注で、本作は「複数の時計の出現によって村が分裂するが、どちらも壊れて再び平和に戻る、という話だが、ここでは時計によって計測可能な時間の存在を否定しているわけではなく、時計を金持ちしかもてないことが問題だとする。多少不正確でも皆がもてることの方が大事だ、という側面に焦点が当てられている」と論じ、本作で提起されているのは、時計という「計測可能な時間の存在」の否定ではなく、貧富の差に関係なく、集団の構成員が同じ時間を共有することの重

要性であると主張している。その他、教材研究の分野では、中川智弘「小川未明の童話作品における時間描写の特性」(『福井大学初等教育研究』平成二八年三月)がある。

(12) 以下、該当箇所。「一九二〇年から三年ころにかけて発表した童話において、未明が語った自然のままの生活とは、「時計のない村」「自分の造った笛」「幸福に暮した二人」に代表される世界であったと思われる。それは、古代中国人の夢想し伝承した「撃壤歌」の世界に通じながら、一方では自然の生命にこもる美を発見しそれを共有しようとする世界であった」

(13) 岡田芳郎は、『明治改暦』(大修館書店、平成一六年六月)で、「文明開化とは西欧化とほとんど同意語であったから、欧米諸国の使用している太陽暦を採用することは、次第に当然と思われるようになっていた。福沢諭吉は『改暦弁』のなかで、改暦に賛成しない者は時代遅れの大馬鹿者だと、反対派を叱っているが、このような考え方が政府の首脳部や啓蒙家たちの大勢であったであろう」と述べ、明治の施政者や知識人が、文明開化の一環として、太陽暦の採用を必然視していた旨、指摘している。また、日本初の鉄道である、品川・横浜間の仮営業が始められたのは、改暦直前の明治五年五月だが、この鉄道は運行当初から、分刻みで発着時間が決められていた。原田勝正は、『明治鉄道物語』(筑摩書房、昭和五八年一〇月)で、「鉄道の運転時刻は、人びとの生活時間を「分」の単位におきかえるという点で大きな意味をもった」と記し、定時法に基づく鉄道の時刻表が、日本人の時間意識に変容をもたらしたとする見方を示している。

(14) 未明の前近代的傾向を指摘した論考としては、秋山清「アナキスト・小川未明」(『文学』昭和三六年一〇月)がある。ここで秋山は、

未明の感想「彼等流浪す」(『矛盾』昭和三年九月)を引き、「未明の前近代的な郷土主義はアナキズムとはいいがたい」「未明の憧憬が、しばしばかつて在りし郷関の静寂と平和を志向しているかに見えることは、退化論的でさえある。儒教における理想が、つねに堯舜の栄光に立還えろうとする以外には、社会と生活との進歩について考えようとしなかったことと似通っている」と分析している。

(15) 時計を主要な素材として扱った小説は、私見の範囲では、見当たらなかった。

(16) 角山栄は、『時計の社会史』(吉川弘文館、平成二六年三月)で、時計出現以後、人々の労働が、作品中心から時計中心のそれ⇨賃労働に変容した旨、指摘している。「ところが近代的時間の成立とともに、仕事はいまや時間に縛られた賃労働へと変わってゆく。重要なことは、機械時計の示す人工的時間で表示された労働時間が、いまや労働を規定するようになるということである」

(17) この反復は、もちろん、時計童話以外でもなされている。例えば、感想「単純な詩形を思ふ」(『時事新報』明治四五年七月一日)では、「物質文明」に反抗し、人間の「原始的感情」を鼓吹することが、詩人の役割であると主張している。また、童話「金齒」(『文芸』昭和一〇年三月)では、主人公の絵描き・令二に「ああ、なんでも単純に限る。単純で、素朴なものは、清らかだ。ちやうど、文明人より、原始人の方が、誠実で、感覚的で、能動的で、より人間らしいのと同じだ。近世になつてから、人間は、墮落した。だんだん本当の美といふものが分らなくなつた」と、「文明人」に対する「原始人」の人間の優位を語らせている。

(北海道大学大学院博士課程)